

日本の森と林業を考える三冊[『日本林業を立て直す：速水林業の挑戦』速水亨著, 『森づくりの明暗：スウェーデン・オーストリアと日本』内田健一著, 『今日も森にいます。東京チェンソーズ』青木亮輔・徳間書店取材班著]

田中, 勉 / TANAKA, Tsutomu

---

(出版者 / Publisher)

法政大学人間環境学会

(雑誌名 / Journal or Publication Title)

人間環境論集 / 人間環境論集

(巻 / Volume)

14

(号 / Number)

1

(開始ページ / Start Page)

54

(終了ページ / End Page)

59

(発行年 / Year)

2013-06

【読書案内 — 環境を学ぶために —】

## 日本の森と林業を考える三冊

田 中 勉

- 『日本林業を立て直す—速水林業の挑戦—』（速水 亨著／日本経済新聞社）2012年  
『森づくりの明暗—スウェーデン・オーストリアと日本』（内田健一著／川辺書林）  
2006年  
『今日も森にいます。東京チェンソーズ』（青木亮輔・徳間書店取材班著／徳間書店）  
2011年

日本の森林と林業の現状について論じられるとき、それぞれ強調点は異なるものの、きわめて多くの問題を抱えておりその解決の道は容易でないこと、が共通認識となっている。戦後の拡大造林により天然林が失われ人工林化が進んだ、しかし木材輸入自由化に伴い、価格の低下が続き森林の手入れがなされなくなっており放置された山は荒れている。木材自給率は27%と低迷し、林業が衰退していく中で小規模林家は経営意欲を失い、林業に携わる人々の高齢化が進み、山間地集落は過疎と高齢化に直面している、などである。

森林は近年その「多面的機能」への関心が高まり、「温暖化」防止のためのCO<sub>2</sub>吸収源としての役割が期待されてもいる。また、現在の日本の山はかつてないほどの緑に覆われ、森林は「飽和」状態にあることを指摘する書籍（太田猛彦,2012,「森林飽和」NHK出版）、も出版されている、この「飽和」は喜ぶべきことでは決してなく、国土保全の面から大いに問題である。森林と林業の「持続可能性」はいかにして可能かが問われている。

以下に3冊を取りあげる。それぞれ異なる立場から書かれたもので、森林と

林業についてのいわゆる「専門書」ではなく、現場に立つてものを考える著者たちの声が聞こえてくるものを選んでみた。

まず、速水亨「日本林業を立て直す－速水林業の挑戦－」である。冒頭には、著者がアラスカ州南東部の森林を訪問し、巨木が並ぶ原生林の大面積伐採が行われている現場に立ち、先住民の収入の確保に理解を示しつつも森の疲弊を指摘し、サステイナブルな森林経営を提案するシーンが取りあげられている。著者は和歌山県尾鷲林業地帯に山林を所有し大径木の育林で知られる速水林業の経営者である。1953年生まれの速水氏は家業の9代目として1000ヘクタール規模の森林事業を引き継いだ。大学卒業後、家に戻り林業に従事し始めた際は現場作業に就き、東京大学造林学研究室での2年間の研究生活を経た後、現在も山主として経営にあたっている。父の速水勉氏にも「美しい森をつくる：速水林業の技術・経営・思想」（2007年、日本林業調査会）という著書がある。

この著書の特色は、日本の林業の現状に対する事業家としての考えが述べられている点にある。速水氏は、林業経営の不振を低価格の外材輸入に帰するだけではなく、日本の林業を自立させるためには、林道の整備・大型機械の導入など経営の合理化を進めることが不可欠とし、補助金の活用も含めて木材価格の下落と人件費の上昇という事態に積極的に挑戦して行こうと述べている。興味深いのは、「人件費の上昇は林業の盛んな地域社会の安定にとってはいいことだった」という記述である。つまり、人件費の上昇は山主と山林労働者の収入格差の縮小につながり、山村における社会的平準化という好ましい結果を生んだというのである、速水氏が事業家としてだけではない視点を持つことをうかがわせる論点と言えよう。「生産性の向上による経営安定」と同時に「森を育て管理する」のが経営者のあるべき姿と考える著者は、「育林コストを含まない木材価格」について厳しく批判している。「400年の森を育てる」と述べる速水氏は、この著書の中で日本林業の行くべき道について政府の林業政策に多く提言をしており、東日本大震災の被災地に移動式製材機を導入することも提案している。

速水林業は森林認証制度「FSC認証」を日本で最初に取得したことで知られているが、著者はなぜ認証を取得しようとしたか、また第三者認証の意義とFSC認証審査の実際について審査員とのやり取りも含めて紹介しており、貴重な証言となっている。認証取得も含めて、本書のテーマは「森林のサステイナ

ビリティ」にあり、林業経営者としての考えが余すところ無く語られている。「森を愛し、村を愛し、人を愛する。これが林業だ」という父の言葉を引いて、「私もそうありたい」と結ばれている。

次に、内田健一「森づくりの明暗－スウェーデン・オーストリアと日本」をとりあげよう、南信州伊那谷の「きこりの親方」を自称する著者による森林・林業に関する論考である。

2001年、岐阜県は「県立森林文化アカデミー」という2年制の専修学校を同県美濃市に開設した。著者は開学当初の教官として赴任し4年間在職するのだが、実践的な森林林業教育をめざして研究室を「森づくり塾」名づけ、山林での実習を中心として社会人学生たちを教育していった。しばらくしてスウェーデンから留学生がやって来たことをきっかけに、2004年8月に社会人学生の5人と共にスウェーデンおよびオーストリアにヨーロッパ林業の研修に出かけることになる。男6人が農家の貸しコテージで合宿しながらの共同生活をしながら各所を訪ねるといふバイタリティあふれる研修の日々を克明に記録した書物であると同時に、現地での見聞の中から日本をふり返り、我が国の森と林業に関する批判的な思索を展開するというスタイルを採っている。スウェーデンとオーストリアで関係先を訪問して、「きこりの親方」ならではの観察を行っているのがこの本の眼目である。訪問先で話を聞くだけではなく、林業会社を訪ねると高能率機械による伐採現場で機械の操作をしたりするなど、森林技術者ならではの「研修」になっている。彼我を比べ「ヨーロッパは進んでいる」という安易な結論に陥らず、自然と地形の違いによる樹木の成長スピードや樹種の特色などに言及し、優れた比較論になっている。

この「研修」は実に多岐にわたる訪問先で行われている。林業会社の事務所と伐採現場、製紙工場、農林高校、森林局、森林組合、私設森林資料館、森林博物館などそれぞれの場所で多くの「同じきこりの仲間だ」と親近感を覚える人々との出会いが綴られている。

ある町の「フォレストデイ」という祭りに出かけ「炭焼き」のおじさんたちに仕組みを説明してもらい、森林官からはスウェーデンの森林と林業に関する規制や法律の歴史や現状について講義を受けるなど、好奇心いっぱい「いい勉強」をした毎日の記録は実に興味深いものがある。

著者は連日の研修に関連して、いわば「脱線」として多くの事柄を論じてい

る。これがこの本のおもしろいところだ。例えば、日本で森林ボランティアに期待するという議論が出ていることについて、それは「幻想」と批判し、「プロ」を育てなければと説く。また、過剰伐採に対する森林認証制度の意義を認めながらも、疑問を呈している。とりわけ、日本の事業者や行政組織の中に認証制度を「ブランド」と考え認証取得テクニックにのみ関心が向いていることについては、実体験を踏まえ厳しい批判を行っている。このように、多岐にわたる話題をとりあげ、林業技術者を育成する教育システムの不備に関して論じている。

この著書で最も関心を引いたのは、「林業は、うまく機能させれば理想的な持続可能な産業」であるという著者の主張である。そして「林業は毎年どんどん成長していくタイプの産業ではない」「前年より多くの成長を望むような社会では、林業はその目的を達することのできない産業なのだ」と極めて明快でラディカル（根源的）な言明がなされている。農業・漁業も含めた第一次産業が、生産と消費を絶えず拡大し続けることによって成り立つ産業（工業）社会すなわち資本主義的経済社会の論理と根本的に相容れない性格を持つ、という指摘である。森林と林業への考察の出発点とすべきと考える。

三冊目に取りあげるのは、青木亮輔+徳間書店取材班「今日も森にいます。東京チェンソーズ」である。青木亮輔氏を取材してまとめられたドキュメンタリー形式の著作である。青木氏は、若者だけの林業事業体「東京チェンソーズ」を創立し代表を務めており、出版時には35歳である。東京農業大学の農学部林学科卒で、現在は東京都西多摩郡檜原村で森林の手入れを行っている。在学中は「探検部」に情熱を注ぎ、卒業後も研究生として「部活」を続けていた青木氏が「緊急雇用対策」により檜原村森林組合で働き始めたのが2001年。そこで知り合った若者たちで森林組合から独立したのが2006年、創業メンバー4人の平均年齢32歳であった。

「東京チェンソーズ」の創立に当たり彼らが考えたのは、森には経済面のほかに環境を保持する公益的機能がある、しかし森は手入れをしなければ機能が失われる、手入れの必要な山がたくさんある、ということであった。そして、「産業としての林業の再生」を通して「環境の悪化を食い止める」ことを目指し、それが「地元の活性化にもつながる」と考えている。「東京の木の下で 地球の幸せのために 山のいまを伝え きれいな水と空気を再生し 持続可能な森

林(もり)を活かし、育みます」を理念として掲げ事業体はスタートした。森林組合の下請け作業から始まり、東京都の「林業認定事業体」となって間伐や下刈り植栽など各種の事業を行ってきている。「林業という職種には“ボロ儲け”はありえない…毎年給料がアップすることもない」とあるように、きつい作業と見合わない収入、林業の衰退の原因の一つであろう。青木氏は「生業としての林業を目指したい」と語り、東京の木を使った住宅を普及させたいと考えている。

この会社のおもしろいところは、収益事業の他に「ツリーライミング」「植樹祭」などのイベントを企画し、市民や子どもたちに「木を知ってもらおう」としていることだ。また、ドイツのチェンソーメーカー製の「カッコいい作業服(ワークウェア)」で作業している。本書の半分ほどのページは写真でしめられており、林の中や作業の様子さらにはメンバーたちのポートレートが掲載されている。ビジュアルに訴える構成となっているが、「東京で林業？」という関心に応える工夫がなされていることもうれしい。

そして、地元檜原村の人々との交流が紹介されており、地域へ根付いて活動していることも「東京チェンソーズ」の特色である。檜原村は山間地のご多分にもれず過疎・高齢化した地域である。青木氏たちは檜原村に住民票を移し、無形民俗文化財に指定されている村の伝統芸能に出演するなど、住民として受け入れられている様子が記述されている。

まだ始まったばかりの若者による林業事業体ながら、「山主(山林所有者、林家)」から信頼を得て、委託作業を拡大しつつあることが報告されている。

ハンディサイズの本書の末尾には、作家の三浦しをん氏と青木氏の対談が掲載されている。同年齢という二人の話はうちとけたもので、青木氏が三浦氏に「一冊の本を書くのにどれくらいの期間がかかりますか？」と尋ねるくだりもあり楽しいものとなっている。

「あとがき」で青木氏は「目指すのは“子どもが憧れる林業マン”です」と述べている。

現状を思うと光の当たらない仕事のイメージのある林業に取り組み前進しようとする若者の姿をビビッドに描く好著である。「東京チェンソーズ」の現在を知りたい方は同社のホームページ(<http://www.tokyo-chainsaws.jp/index.html>)を参照ください。

はじめに述べたように日本の森林と林業の現状は困難に満ち、将来にも明るい展望は持てない。戦後の拡大造林で植えられた人工林は手入れが行き届かず、山は緑だが健康な森ではないと言われる。こうした問題を前に多くの著書が出版されているが、ここで挙げた三冊はいずれも林業現場からの視点から書かれている点に特徴がある。多くの考えるべき事柄を示唆してくれ、有意義な読書になるであろう。